震災は現実だった

大川小であの日の状況想像

山形の佐藤さん 初出場

山形市の放射線技師佐藤祐介さん(29)は初出場ながら北上フォンド（100キロ）を完走した。被災地を訪れるのも初めて。アップダウンの途中、津波到達の高さを示す標識を見て怖さを感じた。「震災は現実だった。自分の目で確かめられてよかった」と語った。

児童・教職員計84人が犠牲になった石巻市の震災遺構大川小では、津波の威力で壁が崩れた校舎に絶句した。あの日の状況を想像し、30分間丁寧に回った。

震災当時は高校1年。山形の被害は少なく、当初は「テレビの中の出来事」だった。数カ月後、宮城県山元町に住む遠縁の3人が亡くなったと母から聞かされた。2人は就学前の兄弟で、数年前にジャングルジムで遊んだことがあった。

葬儀場では兄弟2人の友人や保護者ら多くの人が涙を流していた。「こんなに小さな子が命を失うなんて」。ショックだった。

「人の命に関わる仕事がしたい」。医療関係に進むと決めた。東京電力福島第1原発事故が心に引っかかり、放射線技師を選んだ。

ツール・ド・東北は知っていたが、勉学や仕事が忙しく参加する機会に恵まれなかった。今年春、大会が元々10回の開催を目標としていたと知り、「被災地に行く機会を逃してしまう」と申し込んだ。

「予想よりきつかった。住民の声援やおいしいご飯に勇気と元気をもらい、ペダルが進んだ」と佐藤さん。来年の再挑戦を誓った。

大会初参加で大川小を訪れ、震災当時を想像する佐藤さん＝17日午後1時30分ごろ、石巻市釜谷

2023年9月18日(月)　河北新報